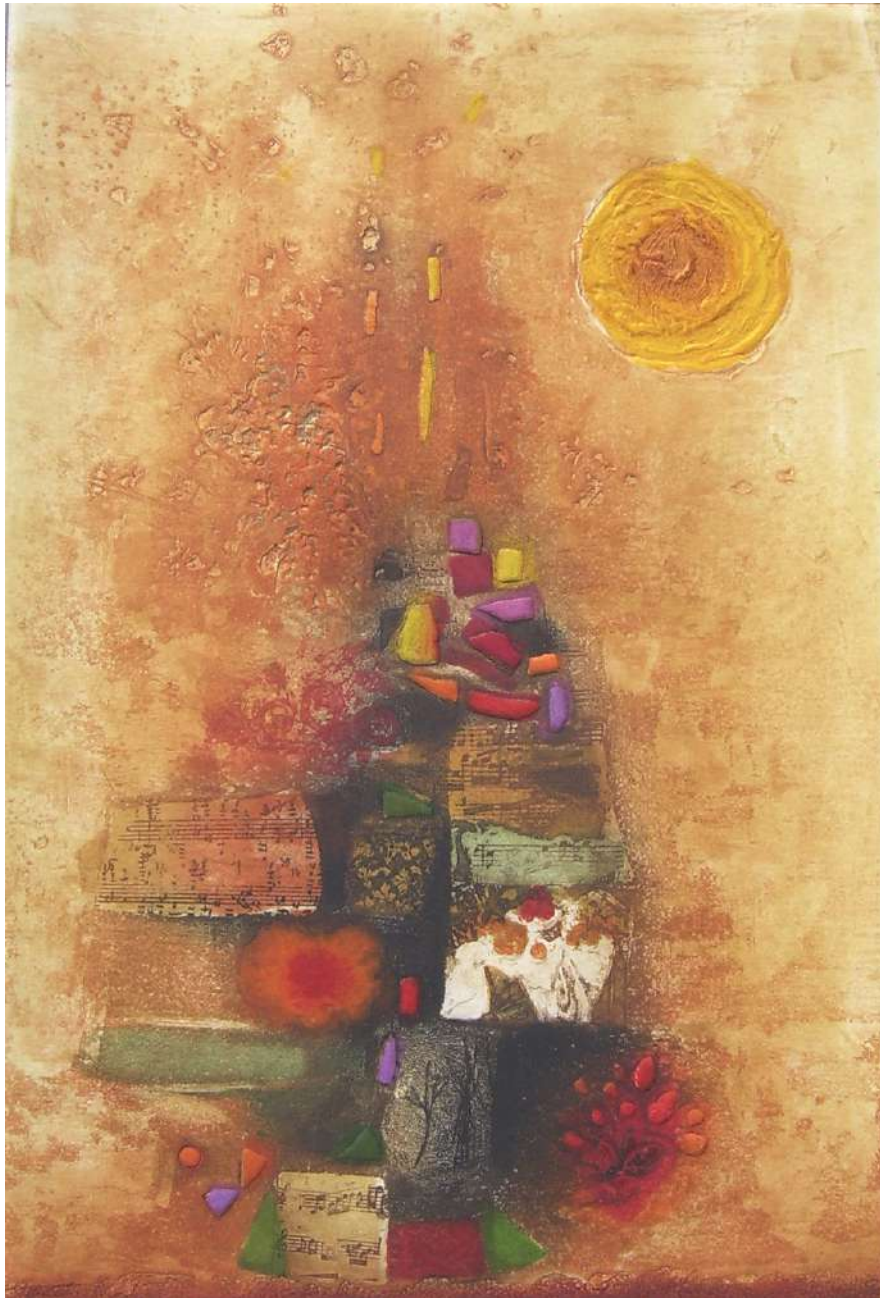

発達理論の学び舎

Back Number: Vol 257

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



目次

- 5121. 趣深い朝に: 日々の時間の使い方
- 5122. 今朝方の夢
- 5123. 今朝方の夢の続き
- 5124. 微笑ましい世界に: 自転車を漕ぐカップルとハーグに住む畏友を思い出して
- 5125. 排水管の詰まりが教えてくれたこと: 年末の断食に向けて
- 5126. 来週の今頃は: ウィーン再訪計画
- 5127. 民族音楽の探究と今朝方の夢
- 5128. 今朝方の夢
- 5129. 今朝方の夢の続き
- 5130. 自然音を聞きながらの夕食: 言葉を越えた世界の認識と生命の流れとしてのメロデーの創出
- 5131. 活字情報を離れる習慣: 今週末からのヴェネチア旅行について
- 5132. 今朝方の夢
- 5133. 開かれつつある新たな感性: 一期一会としての音と「それ」の中に安らぐこと
- 5134. 魂の物語は永遠に
- 5135. 今朝方の夢
- 5136. 歌への想いと自己解決運動をする問いについて
- 5137. 幽玄な境地を体現する横山大観の作品: 荘厳な力の存在を示す夢
- 5138. あの頃の自分と今の自分
- 5139. “composition”の萌芽: 仮眠中の知覚体験
- 5140. オランダの国獣と創造力の解放: 成長に伴う痛みや苦しみの波

5121. 趣深い朝に: 日々の時間の使い方

気温がマイナスに到達するかのような寒い二日間を終え、今日からはまた少し暖かさを取り戻したフローニンゲン。「暖かさを取り戻した」と言っても寒いことには変わらないが、昨日までの二日間と比較してみると随分とマシな寒さである。

今美しいさえずりをもたらしている小鳥たちも、今日からの暖かさを喜んでいるように思う。小雨の滴る音もどこか明るさがある。程よい寒さ、小鳥の鳴き声、小雨の三者が一つになって、趣を作り出している。今この瞬間に顕現している何とも言えない趣は、それらが三位一体となったものである。

昨夜就寝前に、自分の残りの人生を何に対してどのように使っていくのかを改めて考えていた。何に対してどのように使うのかの方向性はもう見えており、どのような実践に従事していくのかも見えている。もちろん、まだ見えていない実践に今後従事する可能性は十分にあり、自分が本当に変貌を遂げ、新たな自己が生まれたら、実践領域が変わり、従事する実践そのものが変わることは何らおかしいことではない。日記や作曲に関しては、変貌後も続けていくであろう実践であり、それは是非とも続けていきたい実践である。

言葉と音を通じてこの世界で生きる自己を表現する取り組みは、本当に一生涯続けていこうと思う。こうした実践に加えて、新たな取り組みとしてどのようなものが生まれるかは、今後の人生を生きる楽しみの一つである。

今後の取り組みへ思いを馳せながら、同時に、何に取り組みまないようにする必要があるのか、つまり何に時間を使わないようにする必要があるのかも再度考えていた。今年1年間はその点を考える機会が多かったため、今は随分と無駄なことに時間を使っていない。自分が本来果たす役割とは関係のない無駄なことに時間を使うことが本当に随分と減った。そのおかげで日記の執筆や作曲実践、さらには読書など、自分が担う活動に十分に従事することができている。

そうした日々が実現されているのは喜ばしいが、一日をもう少し細かく見てみると、まだ私は自分が従事しなくてもいいことに時間を使っていることが多少なりともあるように思える。今後はそうした無駄なことに時間を使わないようにより意識をしていき、それらに従事しないための仕組みを作り、その仕組みを回すことを習慣化させる。ここで述べている無駄なことというのは様々な種類があるが、

それは実践や人生を深めてくれるための迂回的な無駄のことを指しているのではなく、他者や社会が不必要に絡む本当に意味のない事柄のことを指す。自分の実践や人生を深めてくれる意義ある無駄は今後も継続的に行いたい。

それはもはや「無駄」という言葉で表現するのは適切ではないかもしれないが、いろいろな寄り道をしながら日々を過ごしていく。ゆとりと落ち着きの中で寄り道をしながら実践と人生を深めていこう。その一方で、自分が不必要だと思う無駄は根こそぎ排除していこう。

昨夜は、例えばある一つの無駄なことを取り上げ、それに年間何時間従事しているのかを計算するというのをいくつかの無駄なことに対して行っていた。下手をすると、それを10年間続けていれば、何か一つの領域で専門家になれてしまうのではないかと思えるぐらいの時間を投じているものもあった。今一度、自分はこの人生で何をなすことを役割として与えられているのかを考えよう。それを冷静に考えると、いくつかの無駄なことに時間を投じるのは本当に惜しいことがわかる。

この世界には時間泥棒や時間殺人者がたくさんいることに注意しなければならない。それは人の形を取ったものもあれば、社会の仕組みとして存在しているものもある。そうした人や社会とは断固関わらないという態度を堅持したいものである。フローニンゲン:2019/11/2(土)06:35

5122. 今朝方の夢

あと何年何日この場所で生活をするのだろうか。フローニンゲンでの生活も4年目を迎え、当初の予定では1年でこの地を離れることにしていたのが嘘のようだ。人生は本当に何が起こるかわからない。今のところ、やはり来年にライデンに引っ越すことは保留にし、引き続きフローニンゲンで生活を送っていこうと思う。

ライデンは空港に近くで便利な街だが、来年はオランダ南部で生活をする時期ではないような気がしており、引き続きオランダ北部で生活をしていく。南部には人が多く集まる都市がいくつも存在しているが、それが故に私はオランダ南部で生活することを踏みとどまっているのかもしれない。とにかく平穏で落ち着きのある場所で生活をしていくこと。次の居住地はより慎重かつ大胆に検討をしたい。

時刻は午前7時に近づきつつあるが、まだ夜が明けぬフローニンゲン。窓ガラスが雨滴で濡れ、小雨の音と小鳥のさえずりだけが辺りに響いている。

早朝の作曲実践に取り掛かる前に、今朝方の夢について振り返っておきたい。夢の中で私は、日本と欧州のどこかの国が混在した街を歩いていた。その街は、それほど人が多くなく、過度にビルなども建っていなかったため、それほど嫌な感じを私にもたらさなかった。しばらく道を歩いていると、左の方から誰かが私に英語で話しかけてきた。そちらの方を向くと、メキシカンの小柄な男性だった。

その男性は、これから特急列車でシンガポールまで行きたいとのことであり、列車が発車するプラットフォームの番号を教えて欲しいと私に述べた。ちょうど私も駅に向かっている最中であり、過去に一度その列車を使ったことがあったので、なんとなくプラットフォームの番号を覚えていたが、それは定かではなかった。そのため私は、少し幅を持たせて、「確か、1番から3番あたりのプラットフォームだったと思います。確実に5番以降ではないですね」と述べた。するとその男性は嬉しそうな笑顔を浮かべ、私にお礼を述べた。すると、そこから彼は日本語を話し始めた。

メキシカンの小柄な男性:「日本人の方ですか？」

私:「ええ、そうです。日本語がお上手ですね」

メキシカンの小柄な男性:「ありがとうございます。大学で日本語を習っていたんですよ」

私:「そうでしたか。日本語を学ばれたきっかけは何だったんですか？(彼の日本語は確かにうまかったが、まだネイティブの日本語運搬能力とは差があるようだったので、できるだけゆっくり話すようにした)」

メキシカンの小柄な男性:「日本を好きになったきっかけですか？もう一度…」

私:「いえ、どうして日本語を学ぼうと思われたのですか？」

メキシカンの小柄な男性:「実は大学時代に日本人の友人がいて、彼の影響です」

そのようなやりとりをした後、その男性は、日本語を学ぶきっかけとなった友人について話をしてくれた。どうやらその友人は、大学に入学してすぐに、お洒落なオーガニックレストランを経営し始めたそうだ。だが毎年赤字続きで、数年後によりやく黒字になろうかという年に急逝してしまったとのことだった。日本人の大切な友人を亡くしてしまったことにより、彼ともっと日本語で話をしておけばよかったという後悔の念が生まれ、彼との思い出を風化させないためにという理由から日本語を真剣に学び始めたそうだ。

そうした話を聞いたところでちょうど私たちは駅に到着し、その場で別れた。私はこれから埼玉県のある市に向かうことになっていた。ちょうどそこは、友人が住んでいる市であり、過去に何度もその市には足を運んでいたため、どの列車に乗ればいいのかは把握していたつもりだったが、その駅がどこか見慣れないものに思えた。念のため駅員の方に尋ね、乗るべき列車のプラットフォームを教えてもらった。

なぜかエスカレーターを下る際に、エスカレーター脇に雨が滴り落ちていて、雨にかからないように注意する必要がある。エスカレーターの半ばに差し掛かった時に、ちょうど列車がプラットフォームに到着していることに気づいたので、私は少し急ぎ足でエスカレーターを下り、列車の開いているドアから中に入った。すると、予想外に電車が混んでいることに驚いた。立っている人はいないのだが、国外で生活している者からすると、列車に空席がないことが珍しいことに思えたのである。

私は空いている席を探しながら車内を歩いていると、まず一つ空席を見つけた。だが、その横には男性がゴロリと横になっていて、何かぶつぶつと独り言を述べていた。その姿を見た時に、その男性は精神異常者だとわかり、彼の近くに座ることをやめた。そこから車両を変えて移動していると、ようやく一つ席が空いていることに気づき、そこに向かおうとした。すると、私の背中を押し、私を払いのけるかのようにその席に向かおうとする人がいた。

私はその人の存在に気づいていたが、あえて気づかないふりをして、前に行かさない形で空いている席に座った。すると後ろから追い越そうとしていたのは、中学生ぐらいの小さな少年であることがわかった。ちょうど私が座った席の真ん前にも中学生の男の子が座っていて、どうやら私を追い越そうとしていた彼は、その男の子と友達のようなようだった。また彼は、空いている席に座ろうとしたのではなく、その男の子に話しかけに来たようだった。私は悪いことをしたと少し思った。すると、彼は特

段それを気にしているわけではなさそうであり、私の目の前の男の子と話を始めた。そして、元々彼が座っていた席に戻っていった。

すると、私の目の前の男の子が携帯を取り出し、それについて私に話をしてくれた。どうやら新機種の携帯らしく、容量と処理速度がコンピューター並みになっているとのことだった。また、ある暗号資産とも連携している製品らしく、その暗号資産のプロジェクトのロゴが携帯に掲載されていた。しばらく私は、その子との会話を楽しんでいた。フローニンゲン:2019/11/2(土)07:10

5123. 今朝方の夢の続き

時刻は午前7時を迎えた。ようやく空がダークブルーに変わり始め、新たな一日の始まりを告げ始めた。幸いにも小雨が止んだようだ。

起床直後に引き続き、小鳥たちが清澄な鳴き声を高らかに上げている。その泣き声は辺りに響き渡るだけではなく、天高くに上昇しているかのようだ。

つい先ほどまで今朝方の夢について振り返っていたのだが、夢にはまだ続きがあったことを思い出した。覚えている範囲のことを全て書き切ってから早朝の作曲実践を始めたい。

夢の中で私は、ある二人の男女がパラシュートで空高くから降りていく姿を眺めていた。そう、夢の中の私は夢を眺める者としてそこに存在していたのである。その二人の男女がどのような経緯でパラシュートを使って空から降りてきたのかはわからない。だが何となく、どこかから脱出したのだということはわかった。それは空の国かもしれない。

最初二人は、同じような場所を飛んでいたのだが、ある時風向きが変わったのか、二人は離れ離れになった。男性の方は無人島のような方向に向かって落ちていき、女性の方は大きな都市の方に向かって落ちていった。するとまず私の意識は男性の方を追いかけており、男性は無事に無人島のような場所に着陸したことに気づいた。その男性は、ひとまず無事に大地に降り立ったことを喜んでいたら、「何を喜んでやがるのかな？」という低い声がした。声の方を見ると、骨だけの大きなクロコダイルがそこにいた。そのクロコダイルは人間の言葉を話せるようだった。その姿は不気味であり、明らかに人間を襲うような見えてくれをしていたのだが、私はあまり恐怖心を感じなかった。クロコ

ダイルからずっと離れたところの後方には、これまた骨だけの巨大な恐竜がいて、それも人間を襲うような種類だとわかったが、それを見てもあまり恐れを感じを抱かなかった。

クロコダイルを前にした男性の表情を見ていると、私と同じことを感じていたようだったので、とりあえずこの男性は大丈夫だろうと思った。そこで私は、もう一人の女性のことが気になり、そちらに意識を向けてみた。すると、私の意識は移動し、その女性が降り立った街に向かった。不思議なことに、その街とその無人島は意外と近い距離にあることがわかった。空を飛んで移動すれば、ほんの数分の距離であった。

街に降り立った女性を見つけようとすると、すぐに見つけることができた。するとそれまでは夢を観察している意識としての私が、夢の世界の中に入り込んでしまった。私はその女性の目の前に立っており、その女性に話しかけた。見るとその女性は、まだ若いある有名な画家だった。私はその方に、無人島に着陸した男性の状況を伝え、その無人島がどこにあるのかも伝えた。そしてその無人島は、ここからそれほど遠くないということ伝えた。

するとその女性は、無人島の場所を教えて欲しいとのことだったので、私は場所を教えるだけでなく、そこへは空を飛んでいく必要があったので、飛んで連れて行ってあげましょうということ述べた。すると、その女性は嬉しそうな表情を浮かべ、そこから私はその女性の手を取り、手を繋いで空に上昇した。すると、街の上空は風が強くなり、繋いだ手が離れそうになってしまった。手が離れて彼女が地上に落下することを防ぐために、私は彼女を抱き抱えることにし、その姿勢のまま空を飛んでいくことにした。そこで私は、自分の意識が先ほどまであちらこちらを移動しており、移動していたのは意識だけなのだが、ひょっとすると汗をかいているかもしれないと思い、念のため汗臭くないかをその女性に確認した。するとその女性は笑いながら、汗臭くはないと述べ、私も笑った。フローニンゲン:2019/11/2(土)07:32

5124. 微笑ましい世界に: 自転車を漕ぐカップルとハーグに住む畏友を思い出して

この世界には残酷なことが多々あるが、同時に微笑ましいことも多々ある。ちょうど今、バイオダイナミクス農法で作られた四種類の麦のフレークに豆乳とハチミツ、そして大匙一杯のピーナッツバターを加えたものを食べ終えた。このところは午前中には果物だけを摂り、昼時にはビタミン豊富な麦

類のフレークを食べている。これがまた美味であり、日本に一時帰国した際に実家で両親がオーガニックのオートミールを食べていたおかげでこうした麦類のフレークに出会えた。

質素ではあるが、そんな美味の軽食を食べていた時に、一つ微笑ましいことがあった。午前中の早い段階に雨が止み、しばらくは晴れ間が広がっていたのだが、昼食どきになると突然激しい雨が降り始めた。外にいた通行人が思わず雄叫びを上げてしまうぐらいに激しい雨だった。私は激しく降り注ぐ雨を眺めながら、雨の美しさに見入っていた。

しばらくするとまた雨が止み、変わった自転車で通りを走っていくカップルを見た。この自転車はあまり日本では一般的ではないため、説明が難しいのだが、車体がとてつもなく低く、それでいて運転席が前に二つあり、二人で自転車を漕ぐタイプのものだ。車体が高く、前後にペダルがあるものなら想像しやすいかもしれないが、そのタイプのものではない。

カップルの二人は、晴れ間が見えた空の下、笑顔で自転車を漕いでいた。私はもちろんそれを見て微笑ましく思ったのと同時に、「全然進んでないじゃないか！笑」と思わず独り言を述べた。二人は一生懸命にペダルを漕いでいるのだが、進む速度が極めて遅く、思わず笑ってしまったのである。それを見て私は、「私たちの人生というのは、あのように空回りしながらでも前に進むものなのだ」と納得してしまった。そんな微笑ましくも、教えに満ちた光景を目にした。

私は現在、数年前から付き合いがあり、前回のオンラインゼミナールにも参加して下さった二人の友人の方のブログを毎日楽しみに拝読している。二人に対しては大変敬意を評している。一人の友人はオランダのハーグに住んでおり、想像するに、同じような想いで異国の地で生活をしているように感じている。その方のブログを見ると、そうしたことがひしひしと伝わる。

昔から私は、敬意を表する人に対して、敬意とは似ても似つかない言葉でその人を捉える傾向があり、逆にそのおかげで親しみが増すということがある。その友人は女性であり、尚且つ異国で暮らす同志かつ尊敬している人なのだが、あえて親しみを込めて思い浮かんだ言葉というのが、「惰眠を貪る食いしん坊」だった。自分でもその言葉が突発的に自ずから出てきた時には驚いた。その言葉は、一般的に見れば失礼極まりない言葉だが、私にとってはとても人間味のある可愛らしい言葉である。逆にその方が自分をどのような言葉で捉えているのか今度聞いてみようかと思う。

その方も食に関してかなり気を遣っており、色々と試行錯誤をしているようであり、その過程と奮闘ぶりがわかる日記を読むたびに、上述の言葉が芽生えて微笑ましくなる—おそらく本人は真剣に食と向き合おうとしているのだと思うが。

実は私は、食実践を今の自分にとって健全なものに変えていくに際して、食に関する自分の無意識的な抑圧や幼少期の頃の体験などを思い出すようにしていた。これは前回実家に帰った時にも母から聞いた笑い話なのだが、私は幼少期の頃、一人っ子とは思えないほどに食に関してがめつかったそうだ。今、「がめつかったそうだ」と推量形で書いたが、数々のエピソードを覚えている。今はそれについて一つ一つ列挙することはしないが、いずれにせよ、幼少期の頃には食にがめつくなる何かしらの力ないしは抑圧が存在しており、私はその根源を辿っていくということをしばらくの間行っていた。そうしたことを続けていると、自然とそうした抑圧が紐解かれていき、自然な形で今の自分にとって健全な食生活が実現された。それは全く無理のない形で本当に自然になされる食実践だ。

ちょうど先日、その友人と二人に共通の友人の方がフローニンゲンに遊びに来てくれることがあった。一緒にボルダリングを楽しみ、カフェでくつろぎながら楽しいひと時を過ごしたことが懐かしい。実はその頃からすでに上述の言葉でその友人を認識しており、「意外と食いしん坊」という点を微笑ましく思っていた。これはぜひ今度、その友人に尋ねてみたいのだが、実はカフェで私はある実験を思いつき、それを行ってみた。

ちょうど私は、日帰り旅行の時や数日程度の旅行の初日に食べるプロテイン豊富なクラッカーをその時持参していた。ちょうどボルダリングを終えた後だったので、その8枚入りのクラッカーのうち、二人の友人に1枚ずつ渡した。それは紛れもなく善意に基づく行為だったのだが、女性の友人に1枚を渡した時に、ある実験観察を試みようと思ったのである。それは何かというと、意識的にせよ無意識的にせよ、直感的にその方に付した上述の言葉が正しければ、必ず後ほどもう1枚クラッカーが欲しい目をするだろうという考えが芽生え、その瞬間を目撃したいと思ったのである。

それはとてもいじらしい実験なのだが、私はその結果が気になってしょうがなく、そしていかなる結果を迎えるかが楽しみであった。そこから私たちは各々カフェで注文した飲み物を飲みながら、楽しく会話をして過ごしていた。

もう一人の男性の友人は、特にもう1枚クラッカーを欲しがるような目を見せず、それもまた自分の当初の考え通りだった。ちょうどその前に、その友人は「ドイツではついついポテトチップスを食べながらビールを飲んでしまうことがよくあったんですよ」という話をしていたが、その方に対しては「食いしん坊」という言葉が芽生えることはなかった。数年前にも二人はフローニンゲンまで遊びに来てくれ、その時はドイツからわざわざ車で来てくれた。その時も時間を忘れるかのように話をしており、先日もまたそうした形で時間が過ぎていった。

そして、ついにその瞬間がやって来た。女性の友人がついに私の手元にあるクラッカーを見たのである！—私の目にはそのように見えた。その8枚入りのクラッカーは見た目は大した量ではないように見えるのだが、実際にはプロテインを含めた栄養が豊富であり、カロリーも多い。8枚のうち6枚食べただけでも今の私にとっては一食分になりそうぐらいのボリューム感がある。そうであれば、6枚のうちもう1枚ずつを二人にあげても良いかと思ったのだが、私はあえてそれをしなかった。それは二人が食に対して無意識的に見せる反応の違いを確かめたかったのである。

この点はぜひその友人に確認したい。私はカフェで思わず笑そうになり、それを堪えていた。というのも、彼女が見せた仕草は、「もう1枚クラッカーが欲しいなあ。加藤さんもう1枚くれないかなあ〜」という気持ちが滲み出た、3歳児ぐらいの可愛らしくも物欲しげな表情だったからである。その表情を見た瞬間、私は思った通りの反応だと思って笑いが込み上げてきて嬉しくなってしまったのだが、その時はそれを悟られないようにして会話を続けた。

その友人とは以前にコーチングの交換セッションをしており、こうした話も笑いながら共有できると思うのだが、食に関して人は意外と無意識的な反応をしてしまい、それはもしかすると、幼少期の何らかの体験に基づいているものなのではないかと考えさせられる。

その方には、お兄さんと妹さんがいるらしく、もしかすると一人っ子の私とは違った形で、何か食に関する出来事が幼少時代にあったのかもしれないと想像していた。そのようなことを想像しながら麦類のフレークを食べ終える頃には燦然と輝く太陽の光がフローニンゲンの街に降り注いでいた。世界は本当に微笑ましい。フローニンゲン:2019/11/2(土)13:19

5125. 排水管の詰まりが教えてくれたこと:年末の断食に向けて

今日は早朝に雨が降り、正午にも突発的な雨に見舞われたが、午後からは晴れ間が顔を覗かせ、総じてとても穏やかな土曜日であった。午後に街の中心部のオーガニックスーパーに行き、必要なものを購入した。先日言及したように、このスーパーの真ん前の映画館で、ちょうど1週間前の朝に殺人事件があった。犯人は犯行後、その横のサンドイッチ屋で数時間ほど休憩をしていたそうだ。

映画館にせよ、そのサンドイッチ屋にせよ、1週間も経てば以前と何も変わらずに営業がなされている点がどこか不気味に思えた。道ゆく人たちも、この場所で殺人事件があったり、犯人が休憩をしていたことを知っているのかいないのか、全く何も気にしない様子で普通にその前を通ったりしている。

あのような残虐な事件がいともたやすく風化してしまうことを私は恐れる。現代人は本当に、何が異常で正常なのか、何が日常で非日常なのか、そのあたりが錯綜してしまっているのではないかという不安を私は持つ。

買い物から自宅に戻ってきて手洗いうがいをする、排水溝に流れる水がゆっくりであることに気づいた。これまでこうした事態に見舞われると、私はすぐに不動産屋に連絡をし、いつもお世話になっている便利屋に来てもらっていた。だがちょうど前回便利屋に来てもらった時、彼と私はもう長い付き合いであることもあって、彼が作業をする様子をそばで見させてもらうことにした。その時私は、「なるほど、排水管の詰まりはそのように直すのか」と理解した。そのため今回は、自分で排水管の詰まりを直してみようと思ったのである。端的には、排水管の曲がり角あたりにヘドロが付着し、そのヘドロが流れを滞らせているのである。それゆえ、それを取り除き、排水管をきれいにすればいいとわかっていた。実際に排水管のネジを手で回していき、排水管が外れた瞬間にヘドロが床に流れ出てしまうことは過去の観察からわかっていたため、使わない古びた鍋でヘドロを受け、無事に排水管を綺麗にすることができた。

排水管からヘドロを取り出す作業と、排水管の中をブラシで磨くことに時間を要したが、これらの日曜大工的なことが自分一人でできたことに幾分誇らしくなり、誇らしさを感じた自分に対して微笑ましく思った。次回からも自分で排水管の詰まりを直すことができることを嬉しく思う。

次回に向けて少しばかり覚えておきたいのは、排水管のプラスチックのネジを回すことにコツがいるということであり、そのコツをうまく掴めていないと、しっかりと排水管が固定されず、水が漏れてきてしまうことが今回わかった。こうした学習事項をきちんと頭に入れておこう。そこから私はヘドロをトイレに流し、トイレも合わせて綺麗にした。そこでふと、「新しい年を迎える前に、年末近くに一度断食をしよう」と思ったのである。

以前言及したように、自宅の水回りの汚れは口内環境の汚れと対応しており、排水管の詰まりは胃腸のような消化管の詰まりと対応していると思った方がいいかと思う。そこからさらに拡張させて考えると、そうした物理的な環境の汚れは、自分の心理的な内面環境の汚れにも繋がっているように思えるのである。そうしたことから、こまめに水回りや、それだけではなく部屋全体を綺麗にすることを心掛けることは大切かと思われる。少なくとも汚れが自然と溜まりやすい水回りやトイレの掃除は定期的にして行こう。

今回排水管が詰まったことを受けて、いくら食生活に気をつけているとはいえ、食生活や運動だけを通じてデトックスできないものがそろそろ自分の身体に蓄積しているのではないかと考えた。排水管の詰まりというメッセージを受けて、来月に数日間ほどの断食をしようと思う。

前回断食をしたのは随分と前であり、監訳書の最初のレビューをする時だったと思われるため、もう7~8ヶ月前のことになるだろうか。今回は前回のように1週間ほど断食をする必要はなく、3日ぐらいに留めておこうかと思う。調子を見て、5日ぐらいの断食を敢行しようかと思う。フローニンゲン：

2019/11/2(土)17:01

5126. 来週の今頃は:ウィーン再訪計画

時刻は午前6時を迎えた。静けさと闇に包まれた日曜日が静かに始まった。今、換気のために書斎の窓を開けていて、開かれた窓から小鳥のさえずりが聞こえてくる。どうやら昨夜は雨が降ったようであり、地面が濡れている。おそらく街路樹もまだ雨で濡れているのではないかと思う。

そんな木々に立ち止まりながら音楽を奏でている小鳥たち。そうだ、音楽はどのような場所でもどのような環境においても奏でることができる。そんなことを小鳥たちは教えてくれている。

来週の今頃はもうヴェネチアにいる。ヴェネチアに到着するのは土曜日の夕方で、ちょうど来週の今日から本格的にヴェネチア観光を始める。観光初日は、ヴェネチアを代表するサン・マルコ広場近くにあるギャラリーで小松美羽さんの作品を見る。その後、音楽博物館に立ち寄る。そのような計画を立てている。

今回のヴェネチア滞在も、先日の日本滞在と同じようにゆったりとした時間を過ごして行こうと思う。一日に巡る場所は最小限にして、ぶらぶらと街を歩いて様々なものを見て、様々なことを感じよう。

今小鳥たちが雨に濡れた世界の中で音楽を奏でているのと同じように、ヴェネチアにいてもどこにいても、日記の執筆と作曲実践を行なっていこう。いついかなる時にも創造の手を止めないこと。絶え間ない創造によって作られ、そして彩られていくのが自分の人生だ。

ここ数日間、クリムトとシーレに関する芸術雑誌をよく眺めていた。それは就寝前の一つの楽しみであり、二人が芸術家としてどのような道を歩いてきたのかということや彼らの作品、そして二人の関係について色々と知ることができた。

またどこかのタイミングでウィーンに足を運びたい。今度は、ウィーン的美術館でクリムトとシーレの作品を鑑賞したいと思う。前回ウィーンを訪れたときには、もっぱら作曲家の博物館を巡っていた。もちろん美術館にも足を運んだのだが、その時にはクリムトとシーレの作品を意識的には見ておらず、作品を見たかどうかの記憶さえない。仮に見ていたとしても、その時の自分には響かなかったのだろう。だがおそらく、今なら彼らの作品が何かしら自分に響いてくるだろうと思われる。だからウィーンに再度足を運ぼうと思う。

次回ウィーンを訪れる際には、クリムトとシーレの作品が所蔵されてる美術館をいくつか巡り、そしてハイドンの博物館に立ち寄りたい。前回は、モーツァルト、ベートーヴェン、シューヴェルトの博物館には立ち寄っていたが、ハイドンの博物館には立ち寄っていなかった。ハイドンも自分に影響を与えてくれた大切な作曲家である。フローニンゲン:2019/11/3(日)06:24

5127. 民族音楽の探究と今朝方の夢

小鳥たちの清澄な鳴き声が依然として外の世界に響き渡っている。そんな中を先ほど、先日実家に帰った際に父から教えてもらったルーマニアのロマ族のバンド「タラフ・ドゥ・ハイドゥークス」について調べ、彼らの演奏を少しばかり聴いていた。このジプシーバンドは、ルーマニア・クレジヤニ村という場所で結成されたらしい。この村で生活をする人たち、いやロマ人にとって音楽は本当に生活に根付いたもの、さらには人生に根付いたものとなっていることがわかる。

彼らの演奏にしばし耳を傾けていると、今後はより一層民族音楽のリズムやメロディーに関心を持ってみようと思った。以前にポルトガルのリスボンを訪れた際に、そこでファドという民族音楽の博物館に足を運んだように、今後の旅を通じて、民族音楽に関する博物館には積極的に足を運びたい。そうした民族音楽との出会いを通じて、そこでしか育まれない感性や感覚を自分の中に少しでも取り入れていき、作曲の幅を広げていきたい。世界の様々な場所に、多種多様な音楽が存在していることに改めて驚き、そこに人間の多様性を見る。

それでは早朝の作曲実践の前に、今朝方の夢について振り返っておきたい。今朝はいくつか印象に残る夢を見ていた。夢の中で私は、現在フローニンゲンで住んでいる家に近いアパートに住んでいた。そこでも三階に住んでいるらしく、ちょうどこれから引越しをすることになっていた。

母が引っ越しの手伝いに来てくれ、引っ越し業者の手配までしてくれた。もう少ししたら引っ越し業者が到着するという頃になって、段ボールを止めるテープがないと母が述べた。普通であればガムテープで段ボールを止めると思うのだが、私たちは最初から小さい両面テープで段ボールを止めるつもりでいた。その両面テープが見つからなかったのである。

引っ越し業者が間もなく到着するのに、まだ段ボールが開いたままだとまずいとのことで、母はとても焦っているように見えた。一方私は、そんなことを焦ってもしょうがないという態度で、書籍の中身を確認しながら悠長に段ボールに書籍を詰めて行った。すると今度は、靴がないと母が言い始めた。玄関で脱いだはずの靴がないとのことであった。私は「そんなはずはない」と思ったが、確かに玄関には見当たらなかった。

そのアパートは不思議な作りをしており、各部屋にトイレがあるだけでなく、一階にも共同トイレがあるようであり、そこに脱ぎ忘れたのではないかと母に述べた。トイレに母の靴がないかを確認するため、私は階段を降りて行った。すると二階の部屋の扉が大きく開いたままになっていることに気づいた。すると中からポーランド人の比較的若い男性が出てきて、笑顔で何かを私に告げている。

私はポーランド語がわからなかったので英語で話しかけてみると、彼は英語があまり話せないようであり、結局何を言っているのかよくわからなかったが、どうやらどこかの国の大統領が今からここにやってくるとのことだった。そんなはずはないと私は思ったが、一階からそれらしき人が階段から上がってきた。だがよくよく見ると、それは大柄な知り合いの日本人だった。その方に簡単に挨拶を済ませて一階に降りたとき、三階の自分の部屋から、「あつた！」という母の声が聞こえ、どうやら両面テープが見つかったそうだった。「じゃあ後は靴だけか」と思いながら、私は一階に降りて母の靴を探し始めた。そこで夢の場面が変わった。フローニンゲン:2019/11/3(日)07:07

5128. 今朝方の夢

つい先ほど今朝方の夢について振り返っていたが、まだ夢には続きがあるため、それらについても振り返りをしておきたい。起床直後に夢を裏紙に走り書きしていたおかげもあり、依然として鮮明な記憶として残っている。

夢の中で私は、山道を運転するトラックの助手席に座っていた。そのトラックを運転していたのは小中高時代の友人(SN)であった。彼は穏やかな性格を持っているのだが、なぜか車の運転に関しては少々乱暴のように思えた。実際に、カーブがきついこの山道にあっても相当のスピードを出しており、私は冷や冷やししながら助手席に座っていた。あるところで、さすがにスピードを出し過ぎだろうと思ったので、彼にその点を指摘した。本当に命の危険性を感じたため、なんとか彼にスピードを緩めてもらおうと私は説得したのである。

しかし彼はそれを聞こうともせず、引き続きスピードを出したまま運転を続け、大きなカーブに差し掛かったとき、それを曲がりきれず、私たちが乗っていたトラックはガードレールを突き抜けて、山の下の方に向けて転がり落ちてしまった。なんとかトラックが止まり、幸いにも私たちには怪我はなかった。私は「あれだけ忠告したのに…」と友人にぼやくと、彼は血相を変えて、「車を運転しているのは

自分なんだ！指図しないでくれ！！」と泣きながら述べた。私は彼の表情と行動を見て、彼は人から何か言われることに対して心のトラウマがあるのだと察した。それに気づいたとき、夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、私は実際に通っていた高校の教室の中にいた。教室は薄暗く、私以外に数人ほどこしか人がいなかった。どうやらそれらの人は学校の生徒ではなく、部外者のようだった。いったい誰かと思って近づいてみると、どうやら日本人のプロボクサーのようだった。彼はいつでも試合を始められるような格好をしており、上半身は裸だった。すると教室の前の扉から、またしてもプロボクサーらしい男性が入ってきた。その男性はどうやらタイ人のようであり、相当にがたいがよく、強そうに見えた。

これから二人が試合をするのかと思いきや、どうやらすでに試合は終わっていたようであり、あまり強そうに見えない日本人プロボクサーの圧勝だったそうだ。タイ人のプロボクサーは最初はガンを飛ばしているように見えたのだが、どうやらその日本人選手に敬意を表しに来たらしかった。タイ人の選手は片言の日本語で、「ホントウニ、メッチャツヨクッタデス」とその日本人選手に笑顔で述べ、その日本人選手も笑顔で「ありがとう」とお礼を述べた。

二人はボクシンググローブをはめたまま、その場でもう一度拳を合わせ、お互いの健闘を称える意味で抱き合った。その光景は大変清々しいと思っていたところ、突然教室の前の扉から、高校時代の国語の先生が教室に入ってきた。先生は185cmぐらい身長があり、柔道を長くやってきたこともあって、がたいが本当によかった。先生は、日本人プロボクサーを呼びつけ、廊下に出させ、彼のことをしかり始めた。

どうやらそのボクサーは先生の教え子のようだった。先生が何について叱っているのか気になったため、廊下に出てみると、「なんだその腹は！それがプロボクサーの腹か！」とプロボクサーの腹の脂肪について怒っているようだった。今回は運良く試合に勝てたが、そのような体調管理ではもう次は勝てないということを伝えているようだった。

タイ人のボクサーが先生と負けないぐらいの身長であったため気づかなかったが、その日本人ボクサーも本当は180cmぐらいの身長があった。だが、先生の前に立つと身長が縮んでしまい、173cm

ぐらいになっていることに気づいた。そこで夢の場面が変わった。フローニンゲン:2019/11/3(日)
07:27

5129. 今朝方の夢の続き

昨日は午前中に雨が降り、午後からは晴れ間が広がっていたが、今日はどうやらその逆のようである。そうしたことから、近所のスーパーに昼前までには足を運んでおきたいと思う。そこでリンゴと玉ねぎを買う。

今、カラスのような鳴き声がどこからともなく響いてきた。そういえば、オランダには日本にいるようなカラスはいない。種類の違う小鳥のようなカラスならいる。それが今鳴き声を上げていたのだろう。

今朝方の夢について先ほどまで振り返っていたが、そういえばまだその他にも夢を見ていたことを思い出したので、それらについても書き留めておきたい。夢の中で私は、大きな湖の岸辺に立っていた。湖には一艘の大きめなボートが浮かんでおり、そこに何人か人が乗っていた。遠くの方から目を凝らしてボートに乗っている人たちの顔を確認しようとする、なぜかその瞬間に自分もボートの上にあった。

ボートには見知らぬ男女が乗っていて、何やら楽しげに話をしていた。ところが、突然湖に爆弾のようなものが投げ込まれ、湖の水がしぶきを上げ始めたのである。私は一刻も早くこの場から逃げなければならないと思った。その瞬間に自分の身体が消え、意識だけの存在になった。そこからは、意識だけとなった自分の目を通してその続きを眺めていた。

ボートの上にはどこかの国の首相か大統領が乗っており、彼はボートから湖に飛び込み、潜水して逃げることを選択していた。その他の人たちは、手持ちの手榴弾で応戦しようとしていた。どうやら爆弾を投下してきたのは機械ではなく、人間だったようであり、しかもその人間たちもボートに乗って現れた。二艘のボートが互いに近づき、そこからは手榴弾を含め、激しい戦いが始まった。

そうした光景から場面が切り替わり、私はあるレストランの中にいた。そこには小中学校時代の二人の友人(YU & KS)がいて、二人はパスタを食べていた。すると、一人の友人がパスタのソースを服につけてしまったようだった。それを必死に拭き取ろうとする友人。その傍ら、もう一方の友人は、現

在休暇中とのことであり、休暇の期間に特製ジュースを作ると言って張り切っていた。どのようなジュースを作ろうとしているのか尋ねようと思ったところで場面が変わり、今度は雨の中の駐車場に私はいた。

そこで私は、一人雨に打たれながらリフティングの練習をしていた。もう少しすれば、友人たちがその場に現れることを知っていて、一緒に帰ろうと思っていた。しばらくすると、小中高時代から付き合いのある一人の親友(NK)を含めて、何人かの友人が現れた。私は彼らと一緒に帰ろうと思っていたのだが、彼らは私に気づくことはなく、親友が運転する車で先に帰ってしまった。

一人駐車場に取残された私は、この際もう少しリフティングの練習をしようと思い、雨の中引き続きリフティングの練習をしていた。しばらくすると、その親友の母親がやってきて、心配して車に乗せて家まで送ってくれると言う。しかし私はその厚意に甘えることをせず、「一人で走って帰るから大丈夫です」と伝えた。すると親友のお母さんは、「あとでうちに寄ってね。渡したいものがあるから」と述べた。「あとで」と言うのは今日中のどこかでという意味だと分かってはいたが、私は「後日また立ち寄らせていただきます」と述べた。そこで夢から覚めた。フローニンゲン:2019/11/3(日)08:03

5130. 自然音を聞きながらの夕食:言葉を越えた世界の認識と生命の流れとしての メロディーの創出

音楽をかけることもなく、ただ食事を味わう形で夕食を摂ることをここ最近心掛けている。そのようにしていただく夕食は、以前に比べて遥かに美味い。クラシック音楽をかけながら夕食を食べることも悪くはないが、音楽は実は相当の情報量を持っているように思え、そこに意識が向かうと、その情報を処理・咀嚼することにエネルギーが注がれてしまい、夕食を真に深く味わうことが難しくなってしまう。

夕食の時に耳に入れて良いのは、先ほど夕食を摂っていた時にも聞こえていた雨の音や風の音などの自然音だろうか。いずれにせよ、ここ最近の一つ一つの動作・行動を味わうことが習慣になっており、それはとても望ましい。

夕食を摂り終えた時にふと、アイドリングから覚めた意識が思いついたのは、言葉を紡ぎ出すことを継続し、言葉で表現できる限界まで近づくと、言葉にならない超越的な世界の一端が時に垣間見

られるということだった。それは蛍の光のようであり、最初の光だけではそれが何か全くわからないのだが、二回、三回とその光を知覚すると、それがどうやら蛍だということがわかってくる。

日々このようにして取り留めもなく日記を書き続けていると、言葉の認識世界を超えた世界が突如として開けてくることもあり、その世界の知覚現象が何か一瞬の煌めきのように知覚されることがある。そうしたことが時折あるなということを先ほど考えていた。

ここから私は、言葉を超えた世界を把握するための直観的認識というのは、やはり言葉を通じて、言葉を超える形において発揮されるのだろうということを思った。端的には、言葉を超えた世界にアクセスするためには、やはり言葉を用いる必要があり、しかもそれを限界まで使用し、言葉の力が及ばなくなるところまで行かなければならないようなのだ。

それとは全く別の事柄についても先ほど考えを巡らせていた。その瞬間の生命の流れが如実に現れる墨絵を描くように、生命の一瞬かつ一度限りの流れをメロディーとして表現したいという思いが湧き上がってきた。

生命の流れとしてのメロディーを捉え、それを形にしていく試み。それを行っていこう。それに加えて、引き続き優れた作曲家の楽譜を参考に、模写的な作曲実践を続けていく。過去に自分の言葉の感性を養うために、書籍や論文を写経していた地道な実践を思い出そう。それを何年もやっていた自分がいたことを思い出そう。模写は、他者の生命の流れを理解するように努めることであり、そこから自分の生命の固有の流れに目覚め、それを形にしていくことにつながる。

来週の土曜日にはヴェネチアに旅行に出かけるのだが、その前日にボルダリングをしようかと考えている。ボルダリングを行うことそのものが楽しいのだが、それは創造活動を営むための身体作りづくりの意義もある。ボルダリングのような知的全身運動を行っていると、生命の流れが活発かつ円滑になることを実感している。

自分の内側から言葉と音をより自然な形で生み出したいのであれば、それを可能とする身体を育んでいこう。それは当たり前のことなのだが、それを常に自分に言い聞かせるようにしたい。私たちは自分にとって最も身近な存在であるはずの身体を蔑ろにしやすいのだから。

明日からは新たな週を迎える。明日からの新たな週もまた、この人生で一番充実した週になるだろう。新たな週、新たな日は、絶えずこれまでで最も充実したものになる。フローニンゲン:2019/11/3 (日)19:26

5131. 活字情報を離れる習慣:今週末からのヴェネチア旅行について

時刻は午前7時を迎えようとしている。今日はゆったりと午前6時に起床した。実際には午前5時に目を覚ましていたのだが、その直前に興味深い夢を見ていて、再び目を閉じればその夢の続きが見られるかと思い、再度小一時間ほどベッドの上で横になっていた。そのような形で今朝は目覚めた。昨日は9時半過ぎには就寝に向かっていたことを考えると、今日は十分な睡眠を取ることができた。そのおかげもあり、今日もまた活力の漲った形で充実した一日を過ごすことができるだろう。

一時帰国から帰って以降は、毎晩就寝前に必ず誰かしらの画集を眺めることが習慣になっている。一日の最後に目を癒し、心を癒すかのようにして画集を眺め、そして就寝に向かうことができている。これは自分にとってとても良い習慣である。

日中はどうしても活字情報と向き合うことが多い。日記を書くにせよ、読書をするにせよ、そこで媒介されているのは活字である。もちろん日中には、作曲実践を多くしているのだが、そこでも理論書を眺めながら作曲をしている場合には、どうしても活字情報が混入してきてしまう。どうやら文字を大きく離れて生活を送ることは、私たちにとって極めて難しいようだ。

今後はひょっとすると、作曲実践の際には、より純粹に音楽世界の中に浸りることができるかもしれない。そこでは音楽言語というこれまた言語空間が存在しているのだが、活字が作り出す空間とは幾分あるいは随分異なるだろう。

一日の最後に活字空間から離れ、絵画の世界に没入することは、自分の内側に調和をもたらしている。一日の終わりにぼんやりと画集を眺めることは今後も続けていきたい。画集に加えて、楽譜を絵画作品と見立ててそれをぼんやりと眺めることも良いだろう。

今週の土曜日からは、いよいよヴェネチア旅行が始まる。結局4泊5日ではなく、5泊6日の旅行にした。自分がヴェネチアの街で見て回りたいものを計算すると、1日追加する必要があったのである。

幸にも旅行に出かける前日と当日のフローニンゲンは晴れであり、前日にボルダリングジムに行き、ボルダリングを楽しみたいと思う。旅行の初日の夜と翌日の朝に必要な食料は、フローニンゲンで事前に調達しておいてしまおうと思うため、その買い物は前々日に行っておく。その日は小雨が降るようだが、小雨が降りしきるフローニンゲンの街を歩くのもまた一興である。

ヴェネチアに向かう当日も晴れのようにであり、とても助かる。欧州内での旅行はいつも荷物を最小限にしており、今回も荷物は最小限にする。アムステルダムを出発するフライトの時間は午後3時過ぎであるから、フローニンゲンを出発するのはゆったりとでいい。午前中に出発し、昼過ぎに空港に到着して、3時間弱空港のラウンジでくつろぎたいと思う。

天気予報でヴェネチアの気温を確認すると、やはりフローニンゲンに比べて随分と暖かいようだ。とはいえ、ヴェネチアもすでに秋が深まっているようであるから、暖かい格好をしていこうと思う。

秋の深まるヴェネチアで、私は何を見て、何を感じるのだろうか。そしてどのような出会いがそこにあるのだろうか。フローニンゲン:2019/11/4(月)07:07

5132. 今朝方の夢

午前7時を迎えると、空がゆっくりとダークブルーに変わり始めた。時折、小鳥の鳴き声が聞こえてくる。

それでは今朝方の夢について振り返りをしてから、いつものように早朝の作曲実践を行いたい。夢の中で私は、比較的大きな一軒家にいた。その家の畳部屋の中において、部屋に置かれた長机の傍に座っていた。そこは畳部屋であったから、スリッパなど必要なく、靴下のままくつろぐことができ、私は畳の上に直接腰掛けていた。長机の隅っこにはお湯を沸かすポットといくつかの湯呑み、そして和菓子がカゴの中に入れて置かれていた。

私は何をするでもなく、ぼんやりと畳の上に座っていて、しばらく時間を過ごしていた。すると部屋のドアが開き、数人の男性が入ってきた。見ると、全員協働者の方々であり、プロジェクトはそれぞれ違うのだが、知った顔であった。その方たちが何をしに来たかが気になったので尋ねてみると、何やら私のセミナーに参加しに来てくださったとのことであった。

私はその時まで、今から自分がセミナーを行うことになっているとは知らなかった。そこからは私を含めて、4、5人で話を楽しんだ。どうやらこの畳部屋は、セミナーの控室だったのだ。長机の置かれたポットを使ってお湯を沸かしてくださる方がいて、その方が私にコーヒーを入れてくれた。そして、カゴに入った和菓子を勧めてくれた。

私は普段、できるだけ自分が選んだ食べ物以外は口にしないようにしているのだが、その和菓子はその方が買ってきてくださったものとのことであり、コーヒーによく合うということをおっしゃっていたので、一ついただくことにした。そこで夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、私は大きな体育館のような空間にいた。そこには数多くの椅子が並べられており、フロアの真ん中に仕切り線があって、一方は男性が座る専用の椅子、もう一方は女性が座る専用の椅子が並べられていた。そこで何が行われるのか定かではなかったが、私は男性が座る専用の椅子が並べられた場所に行き、前から三列目の席に腰掛けた。すると、私の真後ろに、高校時代の友人(SK)が現れ、彼は私のすぐ後ろの席に腰掛けた。

彼とは仲が良かったので、話をしようと思ったところで、後ろの女性専用の椅子の方から何か声が聞こえてきた。何やら選挙の投票のようなことを行っており、私の後ろに座った友人のどういところが魅力的なのかについて一言で説明した紙を女性たちは投票ボックスに入れ、今まさにその投票結果が読み上げられ始めているところだった。その結果、大半の女性たちが、その友人の魅力は優しさだと述べており、私はそれに大いに同意した。彼の優しさは私もよく知っている。彼はそうした評価に幾分照れ笑いを浮かべていた。

すると私の体は、学校の教室の中にあっただ。そこは学校の教室なのだが、席に着席しているのは全て大人だった。私は教室の一番端の右列の真ん中よりやや後方の席に座っていた。教壇には、サッカー日本代表の小柄な選手(SN)が立っていて、彼がこれから宗教学及び神話学に関する講義をすることになっていた。

講義が始まってみると、みんな静まり返って彼の話の耳を傾けていた。だが、周りの人たちの表情を見ると、宗教学や神話学に関する話は彼らにとってあまり馴染みのないようであり、内容が難しいと感じているようであった。一方で、講師を務めるそのサッカー選手は、聴衆の様子をあまり気にし

ていないようであり、引き続き自分のペースで話を進めていた。あるところから突然彼のテンションが上がりだし、奇声を交えながら講義を進めていく様子は滑稽であった。

教室の中ではおそらく私だけが彼の講義を楽しみ、そしてその内容を理解していたのだと思う。そう思っていると、講師の彼は私を指名し、巫女の誕生背景とその役割について説明するように促した。私はそれに対して、神話学の観点から自説を述べていった。

すると、私の回答は講師の彼の想定を超えたものだったのか、彼は笑顔を浮かべた後に黙ってしまった。すると突然、講師が変わり、ある協働プロジェクトでお世話になっている若い女性の方が教壇に立っており、国語の授業を始めた。私の印象では、その方の性格は穏やかなのだが、授業が進むにしたがって、気性が荒くなり、言葉遣いが乱暴なものになっていった。私から見ると、その方は何かに対して怒りながら授業を進めているように思えたのである。

そこで私は、隣に座っている女性に、「講師の方は何を怒っているのでしょうかね？」と尋ねた。隣に座っている女性はその講師の女性と知り合いのようであったが、「さあ、何に対して怒っているのでしょうかねえ」と笑みを浮かべながら述べた。授業がよいよ終わるという時になって、左横の列に座っていた何人かの女性たちが立ち上がり、廊下に出て行った。それを見た講師の女性は、「まだ授業が終わってないのに何をしているの！」と怒鳴った。私はそれを見て、女性の性格の変貌ぶりは恐ろしものがあるなと思った。

するとそこでまたしても講師が変わり、今度は小中高時代から付き合いのある友人(HY)が教壇に立っており、数学の授業を始めた。確か数学は彼にとっての苦手科目だったことを思い出し、案の定、彼の授業はいまいちだった。授業はすぐさま終わり、ちょうど昼食どきを迎えたので、私たちは一緒に昼食を買いに出かけていくことにした。教室を出てすぐに気づいたが、そこは東京のオフィス街の一等地にあり、近くには日本を代表するメガバンクの本社があり、それらは全て地下鉄駅と直接繋がっていた。

友人と私は教室のあったオフィスビルから地下に行き、地下街のどこかで弁当を購入しようと考えていた。さすがオフィス街であるからか、弁当屋がずらりと地下街に並んでいて、どの弁当屋にしようか迷ってしまうほどだった。しかしなぜか私は、近くにあったコンビニに立ち寄り、そこに置かれてい

る弁当を吟味し始めた。それらに含まれる添加物や栄養の表示を眺めていると、やはり体にあまり良くないものしか置かれておらず、コンビニで弁当を買うことはやめて、ヘルシーな食材で作られた弁当をどこかの弁当屋で見つけようと思った。そこで夢から覚めた。フローニンゲン:2019/11/4 (月)07:42

5133. 開かれつつある新たな感性:一期一会としての音と「それ」の中に安らぐこと

こうしてヨーロッパのある国のとある街で暮らしを営んでいる自分。そんな自分について先ほどぼんやりと考えていた。

今日は月曜日とのことであり、新たな週の最初の平日を迎えたわけだが、フローニンゲンの平日はあいも変わらず穏やかである。時と空間の感覚質が穏やかなのである。

欧米での8年目の生活が、ゆっくりと折り返し地点に向かっている。欧米での生活を始めて、自分がどれほど変わったのかは定かではないが、そこには間違いなく変化があり、とりわけ内面の感覚の変化があった。その変化がどのような類のものであるのかについて先ほどぼんやりと考えていた。

いくつもの観点の中から直感的に選び出されたのは、対極的な文化の中に身を置くことによって、元いた文化的感性を発見し、それが育まれ、そして現在身を置く文化の感性を内在化させるというプロセスから、文化普遍的な感性に向かっている変化があるということであった。換言すれば、欧米での生活を始めたことによって初めて、自分の中にある日本的感性が目覚め、それが育まれていくというプロセスが始まり、それと歩みを共にして、欧米の文化的感性が自分の中に流入し、元々対極的であった二つの感性を超えた感性が芽生えつつあるというのが、今自分が体験している感性発達のプロセスなのではないかと思う、ということである。

赤レンガの家々にオランダ的感性、及びヨーロッパ的感性を見出すだけでなく、そこに日本的感性を見る。それができるようになってきた自分の存在は大きい。

日本の侘び寂びを思わせるかのような白銀色の曇った空が広がっている。それは紛れもなくオランダ上空の空なのだが、同時にそれは日本上空の空でもある。それは当たり前すぎるほどに当たり前である。心理的にもそれは正しく、物理的にもそれは正しい。

自分が生み出す一音一音の音が一期一会であるということ。そしてその一音の中に、その瞬間の自分が全て表現し尽くされているということに改めて驚く。その発見を毎瞬噛みしめながら曲を作っていく。そのようなことを午前中に考えていた。

午前中は、転調を用いた作曲技術とモードを活用した作曲技術の双方を鍛錬していた。その過程の中で生み出された曲を聴いていると、確かに一音一音の中に自分がいるのがわかる。

一音が即自分という存在であるということ。それに驚く。ということは、一音一音の連なりとしての一つの曲は、自分の存在がフラクタル状に具現化されたものなのかもしれない。瞬間瞬間の自分が通った跡、つまり生きた跡が一つの曲になる。

音を通じて自分の心を形にしていくという試み。その瞬間にしか現れない心の形がそこにあり、同時に永遠に現れ続ける心の形がそこにあるということもできる。とりわけ旋律は、自分の心という生命が生きた跡である。生命が呼吸をした跡としての旋律を大事にしたい。

裸の街路樹に止まっている一羽の黒い小鳥がこちらを見ている。その小鳥を私も見ている。では、小鳥が自分を見ていると思う自分と、自分が小鳥を見ていると思う自分を見ている自分とは一体誰なのだろうか。いや、そうした自分を生み出している「それ」に気づこう。そこに存在の真理が隠されている。見られている自分と見ている自分を見ている自分が、「それ」の中に安らいでいる。フローニンゲン:2019/11/4(月)12:49

5134. 魂の物語は永遠に

—長い間、海岸を見失うだけの覚悟がなければ、新大陸を発見することはできない—アンドレ・ジッド

夕方買い物に出かけた時、まだ外は明るかったが、遙か彼方の空に、半月が浮かんでいた。それは地球から遠い太陽の光を反射して、白く輝いていた。そんな月を見ながら、月旅行の実現についてぼんやりと考えていた。民間人が気軽に月に行けるまでにあとどれくらいの時間を要するのだろうか。今から何十年も前には、人類が月に行くなんて考えられなかった時代もあったのだから、それ

を考えると、今から何十年か後、ひょっとするとそれよりも早くに、民間人が気軽に月に旅行に行ける日がやってくるかもしれない。

月から地球を眺めたら、一体どのような気持ちになるのだろうか。自分が生まれ落ちた惑星を外から眺めるという気分はどのようなものなのだろうか。

気がつけば、今日は11曲ほど作っていた。いずれも短い曲なのだが、その瞬間の自分の特定の側面をありありと映し出している。それは確かに側面の描写なのだが、自己の本質を映し出しているとも言える。

フランスの小説家アンドレ・ジイドが、自らの魂そのものと対話する魂の物語としての日記を綴り続けたように、己の魂と対話をするように日記を綴り続けていく。今日もそのような一日であったし、明日もそのような一日なるだろう。それは日記の執筆のみならず、作曲についても当てはまる。つまりところ、日々の作曲実践は、自分の魂との対話なのである。そして一つの曲、そして無数の曲の総体が、魂の物語になる。自分は自分の魂と一緒に、こうした物語を紡ぎ出していたのである。それは言葉と音を通じて、これからもなされていくだろう。

明日からもまた、魂のしなりを言葉にし、魂のしなりを曲にしていく。モンテーニュが「人間は揺れ動く生き物である」と表現したように、魂は揺れ動きながら成熟の歩みを進めていく。その揺れ、ないしはしなりは、言葉と音の形になることを待っている。

少し前に、コラージュ画家のニッサン・インゲル先生について言及していたように思う。インゲル先生が突き詰めていったコラージュ的な絵画創作方法を作曲に活かしていこう。単なるごた混ぜではダメだが、例えば様々な民族音楽のリズムやメロディーをコラージュ的に組み合わせたりしてみよう。その他にも、様々なモードをコラージュ的に組み合わせたりすることを試してみる。音楽上の様々な要素をコラージュ的に統合させていくようなことをいつか実現できたらと思う。そのための学習と実践を明日からもまた続けていく。

今夜もまだ時間があるから、その学習と実践を少しばかり前に進める。それは衝動的になされるものではなく、楽しみと喜びの感情に縁取られた自発的な運動としてなされていく。私はその運動を

行う者であり、運動を見守る者でもあり、運動を生み出すそれそのものでもある。フローニンゲン:

2019/11/4(月)19:21

5135. 今朝方の夢

小鳥たちの鳴き声がいつも以上に美しく感じられる朝。時刻は午前5時半を回り、ゆっくりと6時に向かっている。辺りの闇は深く、まだ世界は目覚めていないかのようだが、小鳥と私はすでに目覚めており、各々の仕方での世界を十全に生きている。

起床直後にヨガをしている際に、意識が深い瞑想状態になっていた。そこに小鳥の鳴き声が入ってくると、それはさらに深い意識の層に自分を促しているかのようであった。いつでも耳を澄ませば聞こえてくる彼らの鳴き声を今日も聞きながら、自分のライフワークを前に進めていこう。

落ち着いた意識の状態の中、今朝方の夢を振り返っている。夢の中で私は、実際に通っていた中学校の教室にいた。それは校舎の二階にあり、階段を上がってすぐのところにあった。私の左隣には、小中高と付き合いのある女性の友人(MH)がいて、授業が始まるまでの休み時間に彼女と少し話をしていた。その話はたわいもなく、先ほどの体育の授業が午前中の早い時間にあつたため、10時半を迎える頃にはもうお腹が空いてしまい、どうしようかという話だった。

そういえば私はサンドイッチを持ってきていたことを思い出し、廊下のカバン置き場に置かれた自分のカバンの中からサンドイッチを取ってこようと思った。すると授業の開始のチャイムが鳴った。しかし私は小腹が空いていたのでサンドイッチを取りにいこうとし、さらには喉が乾いていたので、コーヒーが欲しくなっていた。廊下に出ると、2人の友人(HY & NK)がそこにいた。

手前にいた友人(HY)に、オーガニックコーヒーが校舎で手に入らないかについて尋ねると、「確か保健室にならあつたと思うよ」と教えてくれた。私も保健室でオーガニックコーヒーが飲めることはすでに知っていたが、それは紙コップでしか販売されておらず、しかも分量が少ない。オーガニックコーヒーの飲める場所を教えてくれた彼には一応お礼を述べたが、私は保健室のコーヒーではなく、別のコーヒーが飲みたかった。

階段を降りて靴箱の方に向かうと、後ろから声をかけられた。振り返ると、先ほどコーヒーの場所を教えてくれた友人の隣にいた親友(NK)であり、そしてもう二人別の親友(HS & SI)がそこにいた。彼らもこれからコーヒーと軽食をどこかに買いに行くようであり、私も彼らと一緒についていくことにした。しかし、親友の一人が、コーヒーだけなら私の分のコーヒーを買ってきてくれると言う。もう授業が始まっている時間だったので、私は彼の申し出を有り難く思い、彼にお願いをした。

私は靴箱から教室に引き返し、再度階段を上がっていこうとすると、先ほど私にコーヒーの場所を教えてくれた友人がいた。彼はニコニコしており、その理由を尋ねてみると、自分が運用する投資ファンドの成績がすこぶるよかったそうだ。今年の利回りについて聞いてみると、98%とのことであり、それは異常に高いように思えた。先ほどコーヒーを買いに行ってくれた友人のうち、二人も自分のファンドを運用しているようであり、彼らもそこそこの運用利回りを見せていた。

階段の踊り場にある手洗い場で、三人の直近の運用成績を見せてもらったところ、確かにその友人の成績は良かった。だが、98%との利回りではなくて、実際には11%ほどの利回りであり、他の二人の友人は8%前後だった。私は彼がどのような手法で運用をしているのか、そして彼があとどれくらいの期間投資ファンドを運用する計画があるのかを尋ねた。その背景には、彼に資産の運用を任せられないかを考えていたからである。

彼と話をしていると、もう教室の前に私たちはいて、彼は今後の投資スケジュールと投資に関する秘密事項が書かれた手帳を取りに隣の教室の自分の席に行き、私は自分の教室と彼の教室の間で立って待っていた。自分の教室の方を眺めると、そこは中学校だったのだが、小学校六年生の時にお世話になっていた先生が教壇の椅子に腰掛けていた。まだ完全に授業が始まったわけではなく、生徒が宿題を板書している最中だった。

「今この瞬間に教室に入れば遅刻にならないのではないか？」と私は思い、手帳を取りに行っている彼には申し訳ないが、私は自分の教室に戻ることにした。私の席は、窓際の左から二列目の真ん中辺りの席であり、先生に気づかれないように身を低くして自分の席に戻った。だが先生は、すぐに私が遅れて教室に入ってきたことに気づき、私の名前を呼んだ。私は教壇にいる先生のところに行き、事情を説明した。その時私は、午前中の体育の授業では動き足りず、ちょうど今教室

にいない友人たちと運動をして、それで喉が乾いてしまったので飲み物を買って行ったことを伝えた。

すると先生は、特段怒るわけでもなく、私の説明を聞きながら何か納得しているようだった。そうこうしているうちに、ちょうど三人の友人たちも教室に帰ってきた。そしてなぜだか、彼らの後ろからは三人の若いドイツ人たちがやってきて、彼らはサッカーチームのヴォルフスブルクのユニフォームを着ており、一階のバーでビールを飲みながらサッカーの試合を観戦していたら遅刻したと先生に述べた。先生はそれを聞いて、幾分呆れ顔であったが、ドイツ人の彼らのそうした態度が微笑ましいと思ったのか、彼らの遅刻も許容した。すると、彼らはヴォルフスブルクの応援歌を突然歌い出し、私もそのリズムに乗りながら歌を歌おうとした。フローニンゲン:2019/11/5(火)06:08

5136. 歌への想いと自己解決運動をする問いについて

今朝は寒さがそれほどでもないが、昨日から家の中にいるときもヒートテックを履き始めた。足元をできるだけ暖かくして、何とか暖房の温度を上げないように工夫をしたいと思う。足を温めながらも、頭は冷やし、自分の取り組みに集中できるような状態を整えたい。

書斎の外に意識を向けると、小鳥たちの澄み渡る鳴き声が聞こえてくる。それは自分の意識の奥深くに染み渡っていき、意識をさらに深めてくれるかのようだ。

先ほど今朝方の夢について振り返っており、夢の最後には、三人のドイツ人が現れ、彼らは応援するサッカーチームの応援歌を歌い始めたことを書き留めていたように思う。私も彼らの歌に合わせてリズムを取り、歌を歌おうとしていた。

歌。そう、それはここ最近の私の大きな関心事項の一つである。自分が声を発して歌を歌おうというのではなく、作曲上において、歌の観点を大切にしたいと強く思い始めている自分がいるのである。どうやら私は、作曲を通じて自分なりの歌を歌いたかったのだと知る。自分に対して、そしてこの世界に対して歌を歌いたかったのだ。だからここ最近、旋律を重視するモードに焦点を当てて学習と実践を進めてきたのだと思う。

もともと音楽は歌に起源があるのではないかと思う。歌には魂が宿り、それが他者の魂と共振する。歌にはそのような性質があるのではないか。そうした歌の特性を持った曲を作っていきたい、というのがここ最近の私の思いである。

先日、フローニンゲン¹の街を散歩しながら、オランダ風の家々を眺めていると、「この景観とそれから喚起される自分の内側の感覚をどのようなモードで表現することができるだろうか？」という問いと向き合っていた。その時の私は、今自分がこの目で見ている景色と、自分がその瞬間に感じていることを歌としての曲を通して表現したかったのである。さらには、この物理的な目だけではなく、心眼、あるいは魂眼とも呼べるもので知覚した事柄を歌としての曲を通じて表現したいと思った。その方法について問いを立てている自分がいた。

自分の問いが自分の内側から芽生えたのなら、何の心配もいらない。それはもう解決されたも同然だ。問いは問われることで解決の道を自ずから歩いていく。問いのこうした力には、常々驚かされてしまう。問いは自らにして自らを解決する。見方を変えれば、これが自らが自らを救うということなのかもしれない。

問いが解決されないことを憂いてはならない。それは時間の波に揺られながら、自ずから解決されていく。憂うべきは、自分の問いが自分の内側から出てこないことであり、自分で自分の問いを生み出そうとしないその事態なのだ。

私にできることは、問いを立てるという運動の起点を生み出すことであり、問いの運動を見守りながらにして、その運動の流れの中に居続けることなのだろう。フローニンゲン:2019/11/5(火)06:24

5137. 幽玄な境地を体現する横山大観の作品: 荘厳な力の存在を示す夢

時刻は午前6時半を迎えた。今日もまた、自分の取り組みを焦らず着実に前に進めていく。自分にできるのは本当にそれしかない。毎日がそのために始まり、それを通じて進行し、それによって終わる。そしてまた幸運にも新たな日がやってくる。いつかこうした時の流れのサイクルが自発的に運動をやめるその時まで、自分はこうした日々を淡々と過ごしていく。

昨夜、数年前に島根県の足立美術館で購入した横山大観の画集を改めて眺めていた。大観の晩年の作品を眺め、そこに体現されている幽玄の境地に思わず息を呑み、感嘆の声を上げた。音楽を通じて、こうした幽玄性を表現するにはどうしたらいいのだろうか。それに関しては、技術的な側面も重要だろうが、兎にも角にも内面的成熟を第一要件とするように思える。大観の作品群を眺めながら、そのようなことを考えている自分がいた。今夜もまた大観の作品を眺めよう。

それでは早朝の作曲実践に入る前に、今朝方の夢の続きについて振り返っておきたい。それは続きというよりも、順番としては、先ほど書き留めたものよりも前に見ていたものかもしれない。

夢の中で私は雪山にいた。どうやら吹雪が去った後のようであり、そこには美しい白銀世界が広がっていた。視界も良好であり、辺りはとても穏やかであった。雪山の中腹あたりで、たくさんのライオンが休憩している姿を見かけた。子供のライオンの姿もちらほら見られ、とても可愛らしかった。母ライオンと思えるようなライオンが常に子供のライオンのそばにいて、母ライオンの頭は白いことが特徴的だった。

ふと足元を見ると、なんとそこには実家の愛犬がそこにいて、尻尾を振りながら私の方を見ている。そして後方を見ると、そこには一匹の小さなハイエナがいて、ライオンと行動を共にし、彼らの狩りに便乗することを狙っているようだった。足元にいた愛犬と私は、休憩しているライオンに襲われないように、そっとその場を後にしようと思い、歩き始めた。すると、小さなハイエナが私たちの後をつけ始めた。しかし、ハイエナは別に私たちを襲おうと思っているわけではなく、ライオンと行動を共にしていたように、私たちとも行動を共にしたいのだと思った。とはいえ、愛犬が万一襲われてしまっただけは困ると思い、私たちは少し足早で歩くことにした。

すると、雪山の崖の部分に到着した。そこから先に進むのは困難のように思えたが、遠くの方から母の声が聞こえた。私は声のする方向に向かって、愛犬を預かってもらうようお願いをした。母はその申し出を快諾し、その瞬間、愛犬はリードごとフッと消えてしまった。

おそらく母の元に瞬間移動したのだろうと思い、後ろを振り返ると、そこにはもうハイエナの姿はなかった。そして私の目の前には、巨大なリフトがあった。それはスキーやスノーボード用のリフトに思われたが、どうやら雪山でクライミングをする人たちが乗るものらしかった。

リフトを動く滑車の速度は尋常ではないほどに速く、その速さに振り落とされないようにするためには、相当な筋力が必要であることが容易に想像できた。ある外国人の男性がリフトに乗り、勢いよくリフトで移動している姿を目撃した。私の意識は、リフトを俯瞰的に眺める位置に移動し、改めてその速さと危険性を思った。冬山でクライミングをしようと考えていたその時の私は、やはりそれは大きな危険が付きまとうのだと思い、雪山ではなく、引き続きジムでボルダリングをすることに留めようと思った。そこで夢から覚めた。

今このようにして夢を振り返ってみたときに、ライオンのシンボルが夢に出てくることはこれまでなかったように思えたため、ドリームディクショナリーを調べてみた。すると、ライオンのシンボルは、自分の内側の力強さや勇気などを象徴しているらしいことがわかった。

頭が白い母ライオンの存在が不思議に思っていたので、さらに調べてみると、白いライオンは、自分が荘厳な力を保持していることに突如気付くということ象徴しているらしいことがわかった。それが正しいのであれば、果たして自分はどのような力を保持しているのだろうか。その気づきはまだやってきていない。だがなんとなしに、自分に備わっている不思議な力には最近自覚的になりつつあるように思う。フローニンゲン:2019/11/5(火)06:55

5138. あの頃の自分と今の自分

寂寥感を醸し出すこの寒空の下で、小学二年生の私であれば、どのようにこの情景を表現したであろうか。この話はよく母から聞いており、先日も実家に帰った時に聞いたのだが、小学二年生の時の自分の日記の中に、朝登校中に浴びた太陽の光に関する描写があった。その時の季節がいつだったのかは知らないが、記憶に残っている限りでは、春あたりから夏にかけての登校中の話だったように思う。

気温がこれから上がり始める季節において、朝日もまただんだんと眩しくなっていく。瀬戸内海を眺めながら登校しているその日の私は、燦然と輝く朝日を浴びていた。おそらく、そうした朝日に注目する友人はあまりおらず、いたとしても、気温が上がってくる季節であったから、照りつける朝日を眩しく思ったり、うとましく思う友人さえいたかもしれない。そうした朝日に対して、私は日記の中で、「まるでスポットライトを浴びているかのように気持ちよかった」というような表現でその時の情景と自分の

気持ちを描写していた。大学生まで本など全く読まず、ましてや小学校低学年の時など1ページも本など読んだことのなかった自分が、そのような比喩的表現を用いて情景描写をしていたことに驚く。

毎朝先生に提出する日記が夕方の下校前に戻された時、なぜだかその比喩的な表現の箇所に赤ペンで波線が引かれており、花丸か何か記されていて、そこに先生のコメントがあったように記憶している。私は純粹にその時に自分が見た景色と感じたことを言葉で表現しただけだったのだが、先生はそれを褒めてくれているようだった。そんなエピソードが幼少時代にあったことをふと思い出す。

あの頃の自分なら、今この瞬間の景色をいかように表現するであろうか。太陽が全く見えないこの寒空。薄い霧がかかったような朝のこの雰囲気を、当時の自分であればどのように眺め、何を感じたであろうか。

当時の自分。そう、それは紛れもなく今の自分なのだ。

自我の同一性。今の自分はその頃の自分であって、あの頃の自分は今の自分なのだ。

今自分が目の前の世界をどのように感じているかは、すでに表現し切ってしまった。それを改めて比喩で表現するというのは実に野暮ったく、当時の自分を思い出す過程の中で、それはもう表現しきれぬほどに表現し切ってしまったのだと思う。

過去の記憶の輪郭線をなだること。それによって表現されるものがあり、それによってしか表現されぬものがある。

あの頃の自分も今の自分も、眼前に広がる世界を絶えず愛でている。そうであれば、やはりこの瞬間の私は、この寒空の景色をあえて言葉で表現する必要などないのだと思う。何を隠そう、それはもうすでに言葉で表現し切っているのだから。フローニンゲン:2019/11/5(火)09:36

小雨降りしきる夜。つい先ほど夕食を摂り終え、取り止めもないことをぼんやりと考えていた。ふと、そういえば自分は、小学生の時に日記を書く習慣があっただけではなく、中学生になってからは英作文が好きであったことを思い出した。そして、英作文、あるいは一般的に作文というのは、“composition”という単語が当てられることを思い出し、何か今の自分が作曲 (music composition) に毎日従事していることの深層的な意味が見えてきていた。

“composition”というのは、組み立てること、あるいは構成することを語源に持っており、やはり私は自分の内側の感覚を素材として組み立てることが好きなのだろうと思われた。言葉や音というのはある意味、そうした素材を形にするための手段であり、素材は紛れもなく自分の内的感覚である。作曲実践に絶え間なく従事している自分の特性というのは、もう遙か昔から自分の内側に萌芽として内在していたのである。そのようなことを思っていた。

夕方、近くの運河沿いのサイクリングロードを軽くジョギングした。毎日これが良い気晴らしになっている。必ず毎日足腰を動かし、鍛錬すること。そして外の空気を吸うこと。それをこれからも続けていきたい。それが毎日の創造活動にどれだけ肯定的な影響を与えていることか。

とはいえ今日は、空気の綺麗さを考えると、運河沿いのサイクリングロードよりも、近所のノーダープラントソン公園内をジョギングした方が良さそうだとことを思った。サイクリングロードは意外と大きな道路に近く、その道路は車通りが激しい。また、サイクリングロードには時折、モータバイクが走り、それが通った時の排気ガスの匂いが気になってしまう。明日からは、木々が豊富なノーダープラントソン公園に繰り出して行こう。

いつもと同じように、今日も午後に仮眠を取っていた。今日の仮眠中では久しぶりに、全身がエネルギーの渦に包まれるという体験をした。その時に知覚されていた色はややオレンジがかったであろうか。今回はあまりはっきりと色を認識することができなかった。こうした現象に怯えることは随分と昔に無くなり、今は全身が進るエネルギーに包まれた際には、完全に自己をそこに預けるようにしている。時にはそれは意識を、エネルギーが生まれてくる根源まで運び去ってしまうのだが、それに対しても今はあまり恐怖心を抱いていない。以前であれば、意識がエネルギー体と化してしま

うことや、意識をエネルギーが生まれる場所に委ねてしまうと、どこか戻ってこられない場所に行ってしまうような気がしていたが、小さく実験を重ね、少しずつそうした現象に自己を委ねていくことを続けていると、今ではもうそうした現象が何ら怯えるものではなく、むしろ自分のエネルギーを根底から目覚めさせてくれるかのような現象であると捉えるようになった。

そうした体験に加えて、今日の仮眠中には何かしらのビジョンを見ており、ビジョンが消え去り、完全なる無の世界が開けてきた時、しばらくその夢の世界に自己が浸っていたのを覚えている。そして目を開けたら、そこには寝室の天井があった。フローニンゲン:2019/11/5(火) 19:20

5140. オランダの国獣と創造力の解放:成長に伴う痛みや苦しみの波

しとしと雨が降りしきっている。今夜から明日の朝にかけて雨が降るようだが、明日は朝から比較的天気が良いとのことである。明日は午後にでも、街の中心部のオーガニックスーパーに行き、ヴェネチア旅行前の最後の買い物に出かけたい。ジャガイモ、醤油、そして小さめの豆腐を購入することを忘れないようにし、あとは旅の初日の夜にでも食べる穀物クラッカーを購入しよう。念のため、次の日の夜もそれを食べるかもしれないので、二つほど購入しておこう。もちろん、今回宿泊するホテルのすぐ近くのオーガニック専門店にもそれに類する食品はありそうなのだが、念のためにそれを持っていくようにする。

一日が終わりを迎えようとしている今になって、今朝方の夢に現れた白いライオンについて考えていた。そういえば、オランダの国獣としてのシンボルはライオンなのである。自分がこの国に住んでいることと、今朝方の夢に現れたライオンは何か関係があるのだろうか。

もう一度繰り返すと、白いライオンは偉大な力を象徴する。今朝方見たライオンの中にいた白いライオンは、全身が白だったのではなく、頭部だけが白かった。しかもそれは母ライオンだった。頭だけが白く、それが母ライオンであったことは、自分にとって何を象徴しているのだろうか。それについても考えが巡る。いずれにせよ私は、ライオンを国獣とするオランダでの生活を始めてから、誰しもの中であって、自分の中にもある偉大な力、すなわち、生命力という名の創造的な力がますます生まれ、それが発露し始めているのを感じる。

仮にいつか国を離れる日が来るとするならば、それは自分の中の生命力を完全なまでに育み切った後なのではないかと思われる。生命力を完全なまでに解放し、自分の創造力を解き放つ日。そうした日が来れば、私はこの国を離れて、またどこか別の国で生活を始めるかもしれない。

今年一年間を少しばかり振り返ってみると、今年は成長における安産だったのかもしれない。安産であったのなら、それは真の成長と言えないのだろうか。そうとも言えないように思う。確かに成長には大抵、それに伴う陣痛があるものだが、安産のような形の成長もあり得るのではないかと最近思う。

少し前の日記の中で、ゲーテが人間の成長を見事に言い表していた言葉を書き留めたように、成長が内側から起こる時に外皮は死に、そしてそれは剥がれ落ちていく。剥がれ落ちた外皮の中から力強く芽が出てくる。それが人間の成長である。

そこには必ず死という現象が不可欠なのだが、死というのも老衰的な穏やかな死もありえる。死が十把一絡げに辛く過酷なものとは限らないのだ。思うに、死の本質には平穏さがあるのではないかと思う。死が純然かつ自然な死であるほどに、それは穏やかなものなのではないだろうか。そのようなことを思うと、成長に伴う死というのも、少しばかり違う見方ができるように思う。いずれにせよ、今年自分の身に起こった成長というのは、どこか平穏なものであった。

成長に伴う痛みや苦しみにも変動性という波があるのであれば、来年のそれは高波かもしれないし、今年と同様に瀬戸内海のような穏やかな波であるかもしれない。成長する生命の成長という現象そのものが、もはや波を伴う生命であったか。フローニンゲン:2019/11/5(火)19:45